サハ語とトゥバ語の副動詞の用法概観 *

Overview of the Functions of Sakha (Yakut) and Tyvan Converbs

江 畑　冬 生
EBATA Fuyuki

This study outlines the functions of converbs in Sakha and Tyvan. The usage of converbs in these two Turkic languages indicate three main functions: predicates of non-main clauses (i.e., clause-chaining), adverbial phrases (including postpositions), and the preceding element of complex predicates. Each converb form differs in function and productivity. All Sakha converbs have a clause-chaining function and some may take a person/number marking that is partially related to the switch-reference. The complementizer *dien*, which originated from the sequential converb form of the verb *die* 'to say', has acquired nominal features in the morphosyntactic ground. In Tyvan, the sequential converb almost exclusively serves as a predicate of non-main clauses, whereas the simultaneous and connective converbs are mostly used in complex predicates. The Tyvan connective converb no longer has a clause-chaining function; instead, it has developed into a part of evidential and perfective markers.

キーワード： チュルク語族，副動詞，節連鎖，副詞句，複雑述語
Keywords: Turkic, Converb, Clause-chaining, Adverbial phrase, Complex predicate

1. はじめに

本稿では，チュルク語族北東語群に属するサハ語とトゥバ語の副動詞の用法を，筆者による分類に従って概観する．この分類では，副動詞の用法は節連鎖・副詞句・複雑述語の要素の 3 つに分ける．サハ語とトゥバ語における個々の副動詞は，用法および生産性の点でそれぞれ異なっている．

* 本稿は，科学研究費（課題番号 20H01258, 21H04346, 22H00657）および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「チュルク諸語における情報構造と知識管理 ―音韻・形態統語・意味のインターフェイス―」の支援を受けている．草稿の段階でアクマタリエワ・ジャクシルク，大野秀治，島田一輝，菅沼健太郎，日髙晋介の各氏から貴重なコメントを頂いたことに深く感謝する．

第 2 節では，副動詞に関する類型論的議論を踏まえた上で，日本語の動詞テ形を例にして筆者による副動詞の用法分類を示す．第 3 節では，サハ語の副動詞の用法を記述する．第 4 節では，トゥバ語の副動詞の用法を記述する．第 5 節では，トゥバ語の副動詞を含む証拠性形式の用法を記述する．第 6 節では，トゥバ語連結副動詞を含む形式に由来する完了接辞の用法を記述する．第 7 節で本稿の結論をまとめる．

本稿におけるデータは，特に断りのない限り，筆者によるフィールドワークまたは筆者が作成したコーパスにより集めたものである．グロス付与の詳細ルールに関しては，江畑・Akmatalieva (2022: 8-10) の方針に従うものとする．

2. 副動詞に関する類型論的研究と筆者による用法分類

本節では，いくつかの類型論的研究における副動詞の定義と分類を確認した後，日本語のテ形を具体例として筆者による副動詞の用法の分類を示す．

副動詞とは動詞の屈折形式の 1 つであり，副動詞に関する代表的な文献には Haspelmath and König (1995), Haspelmath (1996), Van der Auwera (1998), Coupe (2006), Ebert (2008) などがある[1]．例えば Haspelmath (1995) や Bisang (1995) では，副動詞は次のように定義される（太字は筆者による）．これらの定義では，副動詞の従属節述語としての機能に重点が置かれていることが見て取れる．

> Haspelmath (1995: 3) “a nonfinite verb form whose main function is to mark **adverbial subordination**”

> Bisang (1995: 141) “verb forms that are specialized for the expression of **adverbial subordination**, but cannot form a sentence on their own”

一方 Nedjalkov (1995: 97) による副動詞の定義 “a verb form which depends syntactically on another verb form, but is not its syntactic actant” はやや異なる．ロシア言語学では，副動詞の「副詞句としての修飾機能」を重視する傾向にある[2]．このことは，(A)に示す用法分類で「単文での副詞句」が筆頭に置かれる点にも現れている[3]．

---

[1] Haspelmath (1996) によれば，converb という術語は Ramstedt (1903) により作られたという．

[2] 同様の見方は，例えば Tursunov (1967: 4) によるキルギス語副動詞の定義 “не указывая на лицо, время, число, обозначает добавочное действие основного глагола”「人称，時制，数を示さず，主動詞の付加的な動作を表す」などにも現れている（以上は Korkina 1985: 10 からの引用である）．

[3] 6.は，副動詞が文法マーカーの一部となる場合を指す．Nedjalkov (1995: 100) はウズベク語の *išla-b-ma* ‘it appears that I have worked’ を具体例として挙げるが，これは *išla-b-man* の誤記であろう．

(A) Nedjalkov (1995) による副動詞の用法分類

1. an adverbial in a simple sentence
2. a secondary or coordinate predicate
3. the predicate of a subordinate clause

} three main types of converbs

4. constituents of complex verbs (new lexical units)
5. constituents of complex verbs formed by standard rules
6. constituents of synthetic or analytic forms

} nonsyntactic functions of converbs

Johanson (1995) は，(B)に示すように副動詞の用法を 4 つに分類している（以下「L1」のように記す）．L1 では *Ali gelince Osman şaşırdı*「アリが来ると，オスマンは驚いた」のように前後の節の主語が異なるが，L2 は *Ali gelince şaşırdı*「アリは来ると驚いた」のように主語が共通するものである．L3 は 2 つの動詞が 1 つの述語を形成するタイプで，*al-ıp gel-*「持ってくる」が具体例として挙げられている（以上の例はトルコ語）．L4 は補助動詞を含む述語であり，キルギス語の *oq-up tur-du*「彼(女)は読み続けていた」が示されている．

(B) Johanson (1995) による副動詞の用法分類

Level 1: the base segment and the converb segment are “full” predications

Level 2: the converb segment and the base segment have the same first actant

Level 3: predicate (predicate core 1 + predicate core 2)

Level 4: predicate core 1 (lexeme + postverb)

以上を踏まえて筆者は，副動詞の用法を大きく節連鎖・副詞句・複雑述語の要素の 3 つに分ける. この分類を Johanson (1995) および Nedjalkov (1995) による分類と対比させると，表 1 のように示せる．以下では，この分類を日本語の動詞テ形を用いて例示する[4].

［表 1］ 副動詞の用法分類

江畑	節連鎖		副詞句	複雑述語の要素		---
Johanson	L1	L2	---	L3	L4	---
Nedjalkov	2.	3.	1.	4.	5.	6.

[4] 節連鎖を行う副動詞の中には，目的や条件などの特定の意味を持つ形式もある（Nedjalkov (1995) は specialized converb と呼ぶ）．Bickel (1998) は Johanson (1995) らの議論を踏まえ，adverbial/modifying 機能と chaining/nonmodifying 機能が同じ形式の中に混在するタイプを「アジア型副動詞」と呼んでいる．日本語の動詞テ形も，基本的には継起関係を表すが語用論的に因果関係などを含意することもあるため（益岡 2013: 171），アジア型副動詞の特徴を示す.

節連鎖用法とは，「本を読んで，レポートを書く」「大雪が降って，越後線が止まった」「学会があって，大阪に来た」などのものである．

副詞句を形成するものには，「急いで」「慌てて」「喜んで」「競って」「極めて」「思いきって」「あらためて」などがある（一部の例は高橋 (2003: 264) から）．これらは，見方によっては副詞を派生するとも言える（新川 (1996:12) も参照）．「～にとって」「～について」「～を通して」のように格助詞に後続して後置詞的に用いられる場合も，副詞句用法に含めることとする[5]．

副動詞を含む複雑述語には，「焼いて食べる」「押して開ける」「座って食べる」のような両要素の語彙的意味が保たれる場合と（表 1 では Johanson の L3 に相当），「読んでおく」「食べてみる」「書いている」のような補助動詞構文の場合とがある．前者はさらに，意味的にいくつかのパターンに分類できる可能性がある．筆者による分類案を表 2 として示す[6]．

［表 2］ 日本語の動詞テ形を含む複雑述語の分類案

連続動作	焼いて食べる，冷やして飲む，破って捨てる，倒れて落ちる
手段	押して開ける，泳いで渡る，揉んでほぐす，干して乾かす，見て選ぶ
原因	働いて疲れる，踏んで壊れる，落として割れる，老いて死ぬ
様態	遊んで暮らす，痩せて見える，会って話す，座って食べる，笑って許す
その他	聞いてあきれる，歌って踊れる，もってまわる，噛んで含める

3. サハ語副動詞の用法

本節では，第 2 節で示した筆者の用法分類に基づき，サハ語副動詞の用法を記述する．まず，表 3 にサハ語副動詞の形式および主語転換と主語標示に関する特徴をまとめる[7]．

[5] 日本語学では，このような後置詞的形式を複合辞あるいは複合助詞と呼んでいる（藤田 2019）．

[6] 複雑述語の定義は岸本・由本 (2014: 1) 「述語要素を二つ以上含みながら意味的には一つの述語として振る舞うもの」に従う．次のパラフレーズを分類基準とする： 連続動作「X してから Y する」，手段「X することにより Y する」，原因「X したために Y する」，様態「X している状態で Y する」．分類案と具体例の選定には，朱茜 (2020)，岳・吉田 (2010)，日高 (2018) を参考にした．

[7] この他に理由を表す-*bičče* があるが（節連鎖用法のみを持つ），ここでは詳しく触れない．表 3 で同時副動詞と継起副動詞の否定形式の対応は Xaritonov (1947) の考えに従うが，別の見方も存在する．Böhtlingk (1851) および Ubrjatova (1972) では，表 3 とは逆の対応を示している．Ubrjatova (1982) は継起副動詞の否定が-*bekke* であり，-(*i*)*mine* は同時副動詞・継起副動詞の両方に対応するという．Stachowski and Menz (1998) でも-(*i*)*mine* が同時副動詞・継起副動詞の両方に対応するものとし，別に否定の副動詞形式として-*bekke* も挙げている．いずれにしても同時副動詞・継起副動詞の肯否の形と用法が対応せず，-(*i*)*mine* と比べて-*bekke* の方が遥かに高い頻度で現れる傾向が観察できる．

［表 3］ サハ語副動詞の形式と主語転換・主語標示

	同時副動詞	継起副動詞	目的副動詞	即座副動詞
肯定	-[ii]/-e	-(e)n	-(ee)ri	-(ee)t
否定	-(i)mine	-bekke	-(i)meeri	-(i)meet
主語転換	不可	可	不可	同主語で標示不可
主語標示	任意	任意	任意	異主語で標示義務

同時副動詞の異形態 -[ii] は動詞語幹末の広長母音から狭長母音への交替を表す

3.1 サハ語の同時副動詞

同時副動詞は節連鎖用法を持たないが，重複することにより節連鎖が可能になる．この際に任意で主語標示が可能だが，主語標示が現れる頻度は極めて低い．主語標示の有無にかかわらず，主語転換はできない．

(1) *uol* *iye-ti-niin* *čey* ***ih-e*** ***ih-e*** *elbeʁ-i* *kepsep-pit-ter*
少年 母-POSS.3SG-COM 茶 飲む-SML 飲む-SML 多い-ACC 話す-PST-3PL
「少年は母親とお茶を飲みながら，多くのことを話した」

(2) *abaahï* *buol-lax-xï-na* *miigin* *sie* ***dii***
鬼 なる-NEUT-2SG-PART 1SG:ACC 食べる(IMP.2SG) 言う:SML
dii-bin *üreʁ-i* *tuoraa-tï-m*
言う:SML-1SG 川-ACC 渡る-N.PST-1SG
「『お前が鬼ならば私を食え』と言いながら，私は川を渡った」

同時副動詞が副詞句として用いられる例には，*bïh-a*「まっすぐ」（< *bïs*「切る」），*sit-e*「完全に」（< *sit*「追いつく」），*taarïy-a*「ついでに」（< *taarïy*「立寄る」），*sïïh-a*「誤って」（< *sïïs*「間違う」），*ahar-a*「～過ぎる」（< *ahar*「過ぎる」）などがある[8].

同時副動詞は，複雑述語の要素として補助動詞構文に現れる．以下，大まかな文法機能と現れる補助動詞をリストする：［継続］*sïrït*「いる」，*tur*「立つ」，*olor*「座る」，*sït*「横になる」，［試行］*sataa*「できる」，*tüs*「落ちる」，［未遂］*sïs*（< *sïïs*「間違う」），［突然］*oʁus*「叩く」，*tüs*「落ちる」，*tart*「引く」，*bier*「与える」.

[8] 同時副動詞に由来する後置詞には *tiiy-e*「～まで」，*taxs-a*「～以上」，*bïh-a*「～の間」，*ïl-a*「～以来」，*kïtt-a*「～と」，*bastïï*「～を含め，～を始め」，*sïrs-a*「～に沿って」，*körs-ö*「～に向かって」などがある．Petrov (1961: 56) では他にも *sïha*「～近く」も取り上げているが，対応の動詞 *sïs*「～しかける」はもっぱら補助動詞としてのみ用いられる．

(3) *tuyaara* *oskuola-ʁa* ***üören-e*** *sïlž-ar*
(人名) 学校-DAT 学ぶ-SML いる-PRS:3SG
「トゥヤーラは学校で勉強している」

同時副動詞の後に移動動詞（*bar*「行く」，*kel*「来る」，*kiir*「入る」，*taʁïs*「出る」など）または運搬動詞 *ïït*「送る」が現れると，移動の目的を表す（*ïït*「送る」の例は 3.4 節の(16)を参照されたい）.

(4) *manna* *kiine* ***kör-ö*** *kel-bit-im*
ここに 映画 見る-SML 来る-PST-1SG
「私はここに映画を見に来た」

3.2 サハ語の継起副動詞

継起副動詞は節連鎖用法を持つ．任意で主語標示が可能で，主語転換も可能である．ただし主語標示と主語転換は相関しないので，主語標示の有無と主語転換の有無に応じて(5)～(8)に示すように 4 通り全ての組み合わせが可能である．

(5) *saŋa* *tutuu-nu* ***söbülee-bekke*** *moskuba-ʁa* *üŋs-el-ler*
新しい 建物-ACC 好む-NEG:SEQ PLN-DAT 不平を言う-PRS-3PL
「彼(女)らは新しい建物が気にいらず，モスクワへ不満を言っている」

(6) *ičiges* *tüün* ***buol-an*** *durda* *ih-i-ger* *kïtaanax-tïk*
暖かい 夜 なる-SEQ 小屋 中-POSS.3SG-DAT 固い-ADVLZ
utuy-an *xaal-bït*
眠る-SEQ 残る-R.PST:3SG
「暖かい夜になり，彼(女)は小屋の中でぐっすり眠ってしまった」

(7) *bil-bet* *sir-ber* ***kel-em-min*** *olus =da* *soʁotoxsuy-du-m*
知る-NEG 土地-POSS.1SG:DAT 来る-SEQ-1SG とても =CLT 孤独を感じる-N.PST-1SG
「私は知らない土地に来て，とても孤独を感じた」

(8) *ekseemen-ner* *eteŋŋe* ***aah-an-nar*** *praktika-ʁa* *tarʁas-pïp-pït*
試験-PL 無事 過ぎる-SEQ-3PL 実習-DAT 散る-PST-1PL
「試験が無事に終わり，私たちは実習へと散っていった」

継起副動詞が副詞句として用いられる例には，*bastaa-n*「初めに」（＜ *bastaa*「1 番目になる」），*ïksaa-n*「急いで」（＜ *ïksaa*「急ぐ」），*soruy-an*「わざと」（＜ *soruy*「頼む」）などがある[9]．なお引用標識 *dien* も継起副動詞に由来するが，この形式については別に 3.5 節で詳述する．

継起副動詞は，複雑述語の要素として現れる．まず連続動作を表す複雑述語には，*ist-en bil*「聞いて知る」，*buhar-an sie*「調理して食べる」などがある．様態を表す複雑述語には，*ïllaa-n saŋar*「歌うように話す」がある[10]．補助動詞構文に関しては，大まかな文法機能と現れる補助動詞をリストする：［結果状態］*sïrït*「いる」，*tur*「立つ」，*olor*「座る」，*sït*「横になる」，［完了］*xaal*「残る」，*kebis*（本動詞用法なし），*tohuy*「迎える」，*uur*「置く」，［移動継続］*is*「向かう」，［突然］*ïl*「取る」，［開始］*er*（本動詞用法なし），*bier*「与える」，［試行］*kör*「見る」，［恩恵］*bier*「与える」，*ïl*「取る」．

(9) *oʁoňňor* *žie-ʁe* ***kiir-en*** *xaal-la*
老人 家-DAT 入る-SEQ 残る-N.PST:3SG
「老人は家に入ってしまった」

可能表現では，可能を表す動詞の継起副動詞形が先行し，語彙的動詞が後に現れる点で特異である．

(10) ***sataa-n*** *bul-bataʁ-ïm*
できる-SEQ 見つける-NEG:PST-1SG
「私は見つけることができなかった」

話し言葉では，動詞述語を持つ肯否疑問文に対し同一の動詞を用いて肯定の応答をする際に，継起副動詞が単独で述語として現れることがある．これはサハ語における副動詞の

[9] 継起副動詞に由来する後置詞には *aah-an*「～のみならず」，*sïltaa-n*「～のせいで」などがある．
[10] 移動を表す *tönn-ön kel*「戻ってくる（戻る＋来る）」のように，補助動詞とすべきかどうか判断が難しいものもある．

脱従属化 (insubordination) と見なせる唯一のケースであり，主節述語に主語標示されないという点でも特異である[11].

(11) *on-u* *kör-büt-üŋ =duo* — ***kör-ön***
あれ-ACC 見る-PST-2SG =Q 見る-SEQ
「あれを見た？」 「見たよ」

3.3 サハ語の目的副動詞

目的副動詞は節連鎖用法を持つ．任意で主語標示が可能だが，主語標示の有無にかかわらず主語転換はできない.

(12) ***mökü-üll-üm-eeri*** *tug-u =da* *kepsee-bet-e*
叱る-PASS-NEG-PURP 何-ACC＝も 語る-NEG:N.PST-3SG
「彼(女)は叱られないように，何も話さなかった」

(13) *kïržïg-ï* ***bul-aarï-bïn*** *suruy-ar-ga* *xolon-nu-m*
本当-ACC 見つける-PURP-1SG 書く-PRS-DAT 試す-N.PST-1SG
「真実を見つけるために，書いてみようと思う」

目的副動詞が副詞句として用いられることはない[12].

目的副動詞は，複雑述語の要素として補助動詞構文に現れる．ただし補助動詞は，次のものに限られている： ［将然］*gïn*「する」，*sïrït*「いる」，*tur*「立つ」，*olor*「座る」，*sït*「横になる」[13].

(14) *tug-u* ***et-eeri*** *gïn-a-gïn-ïy*
何-ACC 言う-PURP する-PRS-2SG-WHQ
「君は何を言おうとしている？」

---

[11] Pellard (2012: 114) は，宮古語大神方言の記述も踏まえ（従来は類型論的に珍しいとされた）継起を表す副動詞から主節で過去を表す形式への発達 (“a cross-linguistically valid evolutionary trend *sequential*/*narrative* > *past*”) が SOV 言語では決して珍しくないものであると述べている．関連して Anderson (2018) は，一部の Sayan Turkic（言語的・地理的に標準トゥバ語に近いチュルク語変種群）では継起副動詞が主節で過去を表す用法も持つに至ったことを示している.

[12] ある種の節連鎖用法として，従属節述語に後置される接続詞 *er-eeri*「～だけれども」（語彙的意味を持たない動詞 *er* の目的副動詞形）が存在する.

[13] 目的副動詞との組合せでは，*utuy*「眠る」のみが補助動詞 *sït*「横になる」と共起する.

3.4　サハ語の即座副動詞

即座副動詞は節連鎖用法のみを持つ．同主語の場合には主語標示を欠き，異主語の場合には主語標示が必須となる．この際の主語標示は所有接辞＋後置詞 *kïtta*「と」による．

(15)　*ïstaan-ï-n*　***ket-eet***　*son-u-n*　*iil-in-en*
ズボン-POSS.3SG-ACC　着る-IMM　外套-POSS.3SG-ACC　掛ける-REFL-SEQ
tahïrža　*taʁïs-ta*
外に　出る-N.PST:3SG
「彼(女)はズボンを履くとすぐに，コートを肩に掛けて外に出た」

(16)　*oskuola-nï*　***büter-eep-pi-n***　***kïtta***　*bülüü*　*üöreʁ-in*
学校-ACC　終える-IMM-1SG-ACC　と　PLN　学習-POSS.3SG
salalta-ta　*lökötööŋ-ŋö*　*učuutal-la-t-a*　*ïït-ta*
長-POSS.3SG　PLN-DAT　先生-VBLZ-CAUS-SML　送る-N.PST:3SG
「私が学校を終えるとすぐに，ビュリュー地方の教育長は（私を）レケチェーンに教師として送った」

Stachowski and Menz (1998: 427) は，異主語ではあるが即座副動詞への主語標示を欠く例文(17)を挙げているが，筆者の調査では複数の母語話者がこれを非文と判断した．サハ語母語話者であるPetrova (2008: 8) も即座副動詞に関して “does require person-marking in switch-reference sentences” と述べ，やはり異主語では主語標示が必須であることを指摘している．

(17) *　*min*　*xos-por*　*kiir-eet*　*ardax*　*tïs-te*
1SG　部屋-POSS.1SG:DAT　入る-IMM　雨　降る-N.PST:3SG
（私が部屋に入るとすぐ，雨が降った）　［Stachowski and Menz (1998: 427)］

3.5　サハ語の引用標識 *dien* の名詞性

サハ語の引用句および引用節は，引用標識*dien*「という」により導かれる．引用標識*dien*は，動詞*die*「言う」の継起副動詞形*die-n*（言う-SEQ）と同音形式である．しかし引用標識*dien*は格接辞が付加しうるなど形態法上で名詞的であり，統語的には名詞句としても連体修飾句としても働く．従って引用標識は，もはや副動詞としての性質を失い新たに名詞性を獲得したことが分かる．

(18) *saŋa-nï* *killer-di-bit* ***dien-i*** *ihit-ti-m*
新しい-ACC 入れる-N.PST-1PL QUOT-ACC 聞く-N.PST-1SG
「『私たちは新しいものを加えた』ということを私は聞いた」

(19) *miexe* *öröbül* *kün* ***dien*** *suox*
1SG:DAT 休日 日 QUOT ない
「私には『休日』というものはない」

(20) *mannïk* *balahïaňňa* *aah-ïa =duo* *aas-taʁ-ï-na*
このよう 状況 過ぎる-FUT:3SG =Q 過ぎる-NEUT-3SG-PART
xahan *aah-ïa-y* ***dien*** *ïyïtïï*
いつ 過ぎる-FUT:3SG-WHQ QUOT 質問
「『このような状況は過ぎるだろうか，過ぎるならいつ過ぎるだろうか』という問い」

4. トゥバ語副動詞の用法

本節では, 第 2 節で示した筆者の用法分類に基づき, トゥバ語副動詞の用法を記述する. まず，表 4 にトゥバ語副動詞の形式をまとめる．ただし本稿では，同時副動詞，継起副動詞, 連結副動詞のみを詳しく取り上げることにする[14]. 否定副動詞の*-beyn* は, 同時副動詞・継起副動詞・連結副動詞の 3 つに対応する.

［表 4］ トゥバ語副動詞の形式

	同時副動詞	継起副動詞	連結副動詞	その他
肯定	-e/-i/-y	-geš	-(i)p	起点-gele，限界-giže，継続-bišaan
否定	-beyn			限界-beeže

4.1 トゥバ語の同時副動詞

同時副動詞は節連鎖用法を持つが，その出現頻度は極めて低いと言える．しかも節連鎖用法で現れることができるのは, (21)のような継続を表す補助動詞構文か(22)のような後に発言内容が続く場合に限られるようである（後者のタイプは日常の話し言葉には現れない）. いずれの場合にも，*tur*「立つ」，*olur*「座る」，*čït*「横になる」，*čor*(*u*)「行く」という 4 つ

[14] 起点副動詞と限界副動詞は節連鎖用法のみを持つ．継続接辞が付加した形式（厳密には副動詞に含まれない）は，副詞節述語または主節述語として現れる．例文は江畑・Akmatalieva (2022: 53) を参照されたい.

の動詞のみが節連鎖用法を持つ.

(21) *čeček-ter-i-n* *stol-ga* *aayla-p* ***tur-a*** *čuruk*
花-PL-POSS.3-ACC テーブル-DAT 整える-CVB 立つ-SML 絵
kör-üp *ka-an*
見る-CVB 置く-PST
「彼(女)はテーブルにそれらの花を飾りながら，絵を見た」

(22) *kaday-ï* ***olur-a*** *čüge* *kurug* *kel-di-ŋ* *čalgaapay* *de-eš*
妻-POSS.3 座る-SML 何故 空っぽ 来る-N.PST-2SG 怠け者 言う-SEQ
「妻は座ったまま『どうして手ぶらで来たんだ，この怠け者！』と言って...」
［高島 (2008: 145)］

同時副動詞が副詞句として用いられる例には，*bašta-y*「初めに」（< *bašta*「始める」），*kož-a*「近くに」（< *koš*「つなぐ」），*neme-y*「その上」（< *neme*「付け加える」），*art-a*「～過ぎる」（< *art*「過ぎる」）などがある[15].

同時副動詞は，上述のケースを除けばもっぱら複雑述語の要素として用いられる．まず連続動作を表す複雑述語には，*olur-a biži*「座って書く」，*čïd-a udu*「横になって眠る」などがある．サハ語あるいは日本語の動詞テ形には見られないタイプの複雑述語として，*ed-e biži*「書き直す（直す＋書く）」，*čar-a kes*「切り離す（割る＋切る）」，*čuur-a sokta*「粉々に叩く（砕く＋叩く）」などの例もある．ただしこれらの例の前部要素は，副詞として解釈する余地もあるかもしれない．補助動詞構文に関しては，大まかな文法機能と現れる補助動詞をリストする：［起動］*ber*「与える」，［完了］*bar*「行く」，［開始］*egele*「始める」，［突然］*šap*「疾駆する」，*kag*「置く」，*düš*「落ちる」，*sok*「叩く」，*tïrt*「引く」，*xalï*「跳ぶ」，*xon*「泊まる」，［可能］*al*「取る」，*šïda*「できる」など.

(23) *čaž-ïm-nï* ***kes-tir-ikse-y*** *ber-di-m*
髪-POSS.1SG-ACC 切る-CAUS-VOL-SML 与える-N.PST-1SG
「私は髪を切りたくなった」

[15] 同時副動詞に由来する後置詞には *šigle-y*「～の方へ」，*tur-a*「～以来」などがある．なお Isxakov and Pal'mbax (1961: 330) によれば，*čedir*「～まで」（< *čedir*「到達させる」）などの一部の後置詞も動詞の同時副動詞形に由来するが，語末母音が脱落した結果として動詞語幹と同音形式になったものであるという.

4.2　トゥバ語の継起副動詞

継起副動詞は，節連鎖用法を持つ．この際に属格接辞が付加しうるが，実際にはほとんど現れない．Bergelson and Kibrik (1995) はトゥバ語に switch-reference が存在し継起副動詞は同主語専用形式だと主張するが，(25)のように異主語でも継起副動詞が用いられることがある．

(24)　*onu*　***dïŋna-aš***　*passažir-ler*　*düš-tü*
　　それ:ACC　聞く-SEQ　乗客-PL　降りる-N.PST
「それを聞いて，乗客たちは降りた」

(25)　*a'd-ïm*　***čit-keš***　*čadag*　*kal-dï-m*
　　馬-POSS.1SG　なくなる-SEQ　徒歩　残る-N.PST-1SG
「私の馬がいなくなり，私は歩きになった」　［Isxakov and Pal'mbax (1961: 332)］

継起副動詞が副詞句として用いられることはない[16].

継起副動詞が複雑述語の要素となる例も，極めて限られている（従って継起副動詞は，節連鎖の専用形式に近いと言える）．継起副動詞を含む複雑述語は，現段階では *al-gaš bar*「持って行く」や *xala-aš kel*「走ってくる」などの移動動詞を含むもののみが見つかっており，補助動詞構文で用いられるものはない．

4.3　トゥバ語の連結副動詞 [17]

連結副動詞は節連鎖用法を持たない．

連結副動詞が副詞句として用いられる例は *kanča-p*「どのように」（＜ *kanča*「どうする」）の他，*orukta-p*「道なりに」（＜ *orukta*「道なりに進む」，*oruk*「道」）や *iyile-p*「2 つに」（＜ *iyile*「2 つにする」，*iyi*「2」）など出名動詞派生接辞-*le* を含むものが多い．同様に出名動詞派生接辞-*le* を含むケースとして，次のような「～語で」もよく用いられる[18].

---

[16] 継起副動詞に由来する後置詞ないし接続詞には *de-eš*「～のため」，*egele-eš*「～から」，*barïmdaala-aš*「～に基づいて」，*bol-gaš*「～と，そして」などがある．

[17] 連結副動詞は，先行研究では соединительное деепричастие (Isxakov and Pal'mbax 1961) や coordinative gerund (Krueger 1977) と呼ばれている．

[18] 引用標識 *dep*「という」も *de*「言う」の連結副動詞形と同音形式である．引用標識 *dep* は副動詞とは異なり連体修飾機能を持つが，サハ語の場合とは異なり名詞性を獲得してはいない．

(26) *monu* ***tïvala-p*** *čüü* *de-er-il*
これ:ACC トゥバ語で話す-CVB 何 言う-AOR-WHQ
「これをトゥバ語で何といいますか？」

連結副動詞は，上述のケースを除けばもっぱら複雑述語の要素として用いられる．まず *iž-ip či*「飲み食いする（飲む＋食べる）」のような並列的タイプがある．これに加えて *solu-p olur*「乗り換える（換える＋座る）」や *sad-ïp al*「買う（売る＋取る）」のような，両要素の足し算からは全体の意味を導きにくい複雑述語も見られるが，多くの例が見つかっているとは言い難い．

(27) *čaa* *mašina* ***sad-ïp*** *al-gan*
新しい 車 売る-CVB 取る-PST
「彼(女)は新しい車を買った」

連結副動詞の後に移動動詞が現れると，移動の目的を表す．

(28) ***turiste-p*** *kel-di-m*
旅行する-CVB 来る-N.PST-1SG
「私は観光しに来ました」

補助動詞構文に関しては，大まかな文法機能と現れる補助動詞をリストする：［継続］*tur*「立つ」，*olur*「座る」，*čor(u)*「行く」，*čït*「横になる」，*kel*「来る」，［完了］*kag*「置く」，*kal*「残る」，［開始］*ün*「出る」，*egele*「始める」，*kir*「入る」，［試行］*kör*「見る」，［恩恵］*ber*「与える」，*al*「取る」，［可能］*bol*「なる」など．

(29) *piter-že* ***čoru-p*** *ka-an =bis*
PLN-ALL 行く-CVB 置く-PST =1PL
「私たちはペテルブルクに行きました」

次の例は一見すると節連鎖用法に見えるが，補助動詞 *tur* を含む複雑述語の前部要素が並列されている構造だと解釈すべきである．

(30) *kažan* ***ud-up*** *karak* ***šiy-ip*** *tur-gan-ïŋ-nï* *bil-bes =men*
いつ 眠る-CVB 目 閉じる-CVB 立つ-PST-2SG-ACC 知る-NEG:AOR =1SG
「君がいつ眠って目を閉じていたのか私は分からなかった」

5. トゥバ語の副動詞を含む証拠性を表す述語形式

トゥバ語の副動詞には，接尾辞-*dir*（動詞 *tur*-「立つ」に由来する）が付加された形式で主節述語として現れ証拠性（推測または非視覚的情報）を表すことがある．ただし接尾辞-*dir* は主節の定形動詞に付加した場合にも証拠性を表すため，以下のような証拠性を表す用法は副動詞に限ったものではない（詳しくは江畑 (2021) も参照されたい）．

同時副動詞を含む証拠性を表す述語形式には，(31)のような非視覚的情報を表すものと(32)のような思考動詞を述語とするものがある．

(31) *kuš-tar* *et-ken-i* ***dïŋna-l-ï-dïr***
鳥-PL 言う-PST-3 聞く-PASS-SML-EVID
「鳥たちの鳴き声が聞こえる」 ［中嶋 (2008: 79)］

(32) *ažïl-dï* *daarta* *dooz-ar* *dep* ***boda-y-dïr*** *=men*
仕事-ACC 明日 終える-AOR QUOT 考える-SML-EVID =1SG
「私は仕事を明日終えようと考えています」

連結副動詞を含む証拠性を表す述語形式には，(33)のような非視覚的情報を表すものと(34)のような推測を表すものがある．

(33) *čaag-ïm* *üžü-y* ***ber-ip-tir***
頬-POSS.1SG 凍える-SML 与える-CVB-EVID
「私の頬が凍えてきた」

(34) *az-a* ***ber-ip-tir*** *=men*
迷う-SML 与える-CVB-EVID =1SG
「私は道に迷いはじめているようだ」

6. トゥバ語連結副動詞を含む形式に由来する完了接辞

完了接辞-(i)vit は，連結副動詞接辞 -(i)p＋動詞 *ït*-「放す」に由来するとされる（Anderson and Harrison 1999: 43, Johanson 2021: 601）．完了接辞は，その直後に付加する接尾辞の有無

および音形により，以下に示すような異形態を持つ．このうち子音始まりの接尾辞が後続する際には異形態が-(i)p となるので，見かけ上は連結副動詞に直接別の接尾辞が付加するようになる．

接尾辞なし：　*biži-**vit***「書け！」
母音始まり：　*biži-**pt**-eyn*「私が書きましょう」，*biži-**pt**-iŋer*「書いてください」
子音始まり：　*biži-**p**-kan*「書いた(PST)」，*biži-**p**-ti*「書いた(N.PST)」，*biži-**p**-se*「書くなら」

Anderson and Harrison (1999: 43) による説明では，完了接辞は命令法において “limited duration, rapidity or perfectivity of the action” を表す点で “plain imperative” とは区別されるという．筆者の考えでは，このうち完了接辞が用いられる動機として最も重要なのは perfectivity ないしは結果の含意である．その 1 つの傍証として，完了接辞が否定命令文に現れる例は現時点では見つかっていないことがある．

(35)　*maŋaa*　*men-i*　*düžür-**üpt**-üŋer*
　　ここで　1SG-ACC　降ろす-**PRF**-IMP.2PL
「ここで私を降ろしてください」

(36)　*soŋga-nï*　*xa-**apt**-ïŋar*
　　窓-ACC　閉める-**PRF**-IMP.2PL
「窓を閉めて下さい」

完了接辞は，命令法以外の文にも現れうる．この場合にも完了接辞の有無による意味の違いは明確には分かっていないが，やはり筆者が重要だと考えるのは結果の含意である[19]．(39)のような否定文に現れる場合にも，「私が起きなかった」という結果がこの接辞が用いられる最大の動機になっていると思われる．

(37)　*olar-nïŋ*　*biree-zi =bile*　*čugaala-ž-ïp*　*čettig-**ip**-ti-m*
　　3PL-GEN　1-POSS.3 =INST　話す-RECP-CVB　できる-**PRF**-N.PST-1SG
「彼(女)らのうちの 1 人と話し合うことができた」

[19] Anderson and Harrison (1999: 43) による説明では，過去時制では “a single perfective action” を表し非過去時制では “a series of individual perfective actions with a habitual sense” を表すのだという．これに加えて，素早さや意外性を表す場合もあるという．

(38) *süt xöl* *kožuun-da* *sezen dört* *kiži* *ažïl-dï* *tï-**p**-kan*
地名 地区-LOC 84 人 仕事-ACC 見つける-**PRF**-PST
「スト=ヘル地区では 84 人が仕事を見つけた」

(39) *čüge* *men-i* *ottur-**up**-pa-an =sen* *dep*
なぜ 1SG-ACC 目を覚まさせる-**PRF**-NEG-PST =2SG QUOT
aša-a-n *čemele-en*
夫-POSS.3-ACC 責める-PST
「(妻は) なぜ君は私を起こさなかったのかと夫を責めた」

7. まとめ

本稿ではまず，副動詞の用法を節連鎖用法・副詞句用法・複雑述語の要素の 3 つに分類するという提案を行った．次にこの分類に従い，チュルク語族北東語群に属するサハ語とトゥバ語の主な副動詞の用法を概観した．3 節と 4 節で検討した 7 つの副動詞の用法を，本稿での分類に従ってまとめると表 5 のようになる[20].

［表 5］ サハ語とトゥバ語の副動詞の用法まとめ

	S 同時	S 継起	S 目的	S 即座	T 同時	T 継起	T 連結
節連鎖	▲1	○	○	○	▲2	○	×
副詞句	○	○	×	×	○	×	○
複雑述語	○	○	▲3	×	○	▲3	○

▲1： 重複でのみ可能
▲2： 4 つの動詞のみ可能
▲3： 生産性が極めて低い

本稿の結論をサハ語とトゥバ語の対照という観点も含めてまとめると以下の通りである．

(A) 節連鎖用法．サハ語では 4 つすべての副動詞に節連鎖用法が見られるが（ただし同時副動詞は重複でのみ節連鎖用法を持つ），トゥバ語では主として継起副動詞のみが節連鎖

[20] サハ語の即座副動詞-(ee)t の起源は，モンゴル系言語からの借用という説とチュルク語に由来するという説がある（Böhtlingk (1851: 310), Ubrjatova (1976: 43), Slepcov (2007: 227)）．即座副動詞が節連鎖の（ほぼ）専用形式という点でトゥバ語継起副動詞-geš と一致する点は，チュルク由来説の 1 つの根拠となりうる．なおトゥバ語継起副動詞-geš の同根形式は，現代チュルク語ではタタール語，バシュキル語，ウズベク語，ウイグル語，西部裕固語，ハカス語カチン方言などに分布するという（Ščerbak 1981: 131-132，钟进文 2007: 158, Johanson 2021: 756）．

を行う（ただし表 4 にも示したように，他にも節連鎖専用の副動詞がある）．トゥバ語の連結副動詞は，節連鎖機能を持たないという点で特徴的である．なお興味深いことに，連結副動詞は他のチュルク語における継起的節連鎖を行う副動詞と同源形式である．

(B) 副詞句用法．副詞句用法が見られるのは，サハ語の同時副動詞・継起副動詞とトゥバ語の同時副動詞・連結副動詞である．両言語はさらに，これらの副動詞形式に由来する後置詞・接続詞・引用標識が存在する点でも共通する．

(C) 複雑述語の要素. サハ語の即座副動詞を除く形式は, 複雑述語の要素として現れうる．連続動作を表す複雑述語の前部要素には，サハ語の継起副動詞とトゥバ語の同時副動詞が現れる．目的を表す複雑述語の前部要素には，サハ語の同時副動詞とトゥバ語の連結副動詞が現れる．他にも様態を表す複雑述語（サハ語の継起副動詞）や並列を表す複雑述語（トゥバ語の連結副動詞）の例が得られたが，どのようなタイプの複雑述語が可能であるのか，さらに調査を進める必要がある．補助動詞構文では，サハ語の同時副動詞・継起副動詞とトゥバ語の同時副動詞・連結副動詞が極めて生産的に用いられる．

両言語における副動詞は，統語法（節連鎖を行う複文），文法カテゴリ（補助動詞構文が表すアスペクト・モダリティ・証拠性や副動詞を含む文法形式），レキシコン（副詞や複雑述語）に幅広く関わる点で重要な形式であると言えるだろう．

略号

ACC: 対格，AOR: アオリスト，AUX: 補助動詞，CAUS: 使役，CONT: 継続，CVB: 連結副動詞，DAT: 与格，EVID: 証拠性，GEN: 属格，IMP: 命令法，IMM: 即座副動詞，INST: 具格，LOC: 処格，LMT: 限界副動詞，NEG: 否定，NEUT: 形動詞中立，N.PST: 近過去，PASS: 受身，PL: 複数，POSS: 所有接辞，PRF: 完了，PRS: 現在，PST: 過去，PURP: 目的副動詞，QUOT: 引用標識，RECP: 相互，SEQ: 継起副動詞，SG: 単数，SML: 同時副動詞，VOL: 願望，WHQ: 疑問詞疑問

参考文献

Anderson, Gregory D.S. (2018) The multi-functional converb *-GAš* and related forms in Sayan Turkic. *Turkic Languages*. vol.22, 230-285.

Anderson, Gregory D. and K. David Harrison. (1999) *Tyvan*. München: Lincom Europa.

Bergelson, Mira B. and Andrej A. Kibrik (1995) The system of switch-reference in Tuva: Converbal and masdar-case forms. Martin Haspelmath and König Ekkehard (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective*. 373-414. Berlin/New York: Mouton.

Bickel, Balthasar. (1998) Review article: Converbs in cross-linguistic perspective. *Linguistic Typology.* vol.2, 381-397.

Bisang, Walter. (1995) Verb serialization and converbs — differences and similarities. Martin Haspelmath and König Ekkehard (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective*. 137-188. Berlin/New York: Mouton.

Böhtlingk, Otto. (1851) *Über die Sprache der Jakuten*. St. Petersburg. [Reprinted in 1963, Indiana University Publications, Uralic and Altaic Series, vol. 35. The Hague: Mouton.]

Coupe, Alexander R. (2006) Converbs. Keith Brown (ed.) *Encyclopedia of languages and linguistics*. [2nd Edition]. vol.3, 145-152. Oxford: Elsevier.

Ebert, Karen H. (2008) Forms and functions of converbs. Karen H. Ebert, Johanna Mattissen, and Rafael Suter (eds.) *From Siberia to Ethiopia: Converbs from a cross-linguistic perspective*. 7-33. Zürich: Universität Zürich.

Haspelmath, Martin. (1995) The converb as a cross-linguistic valid category. Martin Haspelmath and König Ekkehard (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective*. 1-55. Berlin/New York: Mouton.

Haspelmath, Martin. (1996) Converb. Keith Brown and Jim Miller (eds.) *Concise encyclopedia of grammatical categories*. 110-115. Amsterdam: Elsevier.

Haspelmath, Martin and König Ekkehard (eds.) (1995) *Converbs in cross-linguistic perspective*. Berlin/New York: Mouton.

Isxakov, F.G. and A.A. Pal'mbax. (1961) *Grammatika tuvinskogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Izdatel'stvo Vostočnoj Literatury.

Johanson, Lars. (1995) On Turkic converb clauses. Martin Haspelmath and König Ekkehard (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective*. 313-347. Berlin/New York: Mouton.

Johanson, Lars. (2021) *Turkic*. Cambridge: Cambridge University Press.

Korkina, E.I. (1985) *Deepričastija v jakutskom jazyke*. Novosibirsk: Nauka.

Krueger, John R. (1977) *Tuvan manual*. Bloomington: Indiana University.

Nedjalkov, Vladimir P. (1995) Some typological parameters of converbs. Martin Haspelmath and König Ekkehard (eds.) *Converbs in cross-linguistic perspective*. 97-136. Berlin/New York: Mouton.

Pellard, Thomas. (2012) Converbs and their desubordination in Ōgami Ryukyuan.『言語研究』第142号, 95-118.

Petrov, N.E. (1961) Otglagol'nye poslelogi v jakutskom jazyke. *Naučnye soobščenija*. vol.6, 45-58.

Petrova, Nyurguyana. (2008) A corpus study of Sakha (Yakut) Converbs: A case of *Baran*. *Proceedings of the 24th Northwest Linguistics Conference*. vol.27, 1-9.

Ramstedt, Gustaf John. (1903) *Über die Konjugation des Khalkha-Mongolischen*. Helsingfors: Die Finnische Litteraturgesellschaft.

Ščerbak, A.M. (1981) *Očerki po sravnitel'noj morfologii tjurkskix jazykov (glagol)*. Moskva: Nauka.

Slepcov, P.A. (2007) *Саха тылын историята*.［サハ語の歴史］ D'okuuskaj: SGU.

Stachowski, Marek and Astrid Menz. (1998) Yakut. Lars Johanson and Éva Ágnes Csató (eds.) *The Turkic languages*. 417-433. London: Routledge.

Tursunov, Askar. (1967) *Deepričastija v sovremennom kirgizskom jazyke*. Moskva.

Ubrjatova, E.I. (1972) Kratkij grammatičeskij očerk jakutskogo jazyka. P.A. Slepcov *Jakutsko-russkij slovar'*. 569-605. Moskva: Izdatel'stvo sovetskaja ènciklopedija.

Ubrjatova, E.I. (1976) *Issledovanija po sintaksisu jakutskogo jazyka. II Složnoe predloženie. Kniga 2*. Novosibirsk: Nauka.

Ubrjatova, E.I., et al. (eds.) (1982) *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.

Van der Auwera, Johan. (1998) Defining converbs. Leonid Kulikov and Heinz Vater (eds.) *Typology of verbal categories*. 273-282. Tübingen: Niemeyer.

Xaritonov, L.N. (1947) *Sovremennyj jakutskij jazyk*. Jakutsk: Gosizdat JaASSR.

江畑 冬生 (2021) 「トゥバ語における証拠性と自己性」『言語の類型的特徴対照研究会論集』第 3 号, 15-30.

江畑 冬生・Akmatalieva Jakshylyk (2022) 『サハ語・トゥバ語・キルギス語の文法対照』 新潟大学人文学部・アジア連携研究センター.

岸本 秀樹・由本 陽子 (2014) 「複雑述語研究の射程」 岸本 秀樹・由本 陽子（編）『複雑述語研究の現在』1-15. ひつじ書房.

岳 莎莎・吉田 光演 (2010) 「日本語の複合動詞とテ形動詞の比較 ―中国人日本語学習者の誤用を通して―」『人間科学研究』5 号. 57-68.

朱茜 (2020) 『日本語と中国語における「動詞＋動詞」型複合動詞と「動詞＋動詞」型複雑述語の対照』 新潟大学博士論文.

高島 尚生 (2008) 『基礎トゥヴァ語文法』 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所.

高橋 太郎 (2003) 『動詞九章』 ひつじ書房.

中嶋 善輝 (2008) 『トゥヴァ語基礎例文 1,500』 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所.

新川忠 (1996)「副詞について」『教育国語』 2(21), 9-18.

日高 俊夫 (2018) 「V テ V における再分析 ―複合動詞との統一的分析に向けての覚え書き―」『九州国際大学国際・経済論集』 第 2 号, 17-38.
藤田 保幸 (2019) 『複合助詞の研究』 和泉書院.
益岡 隆志 (2013) 『日本語構文意味論』 くろしお出版.
钟进文 (2007) 『西部裕固语描写研究』 民族出版社.